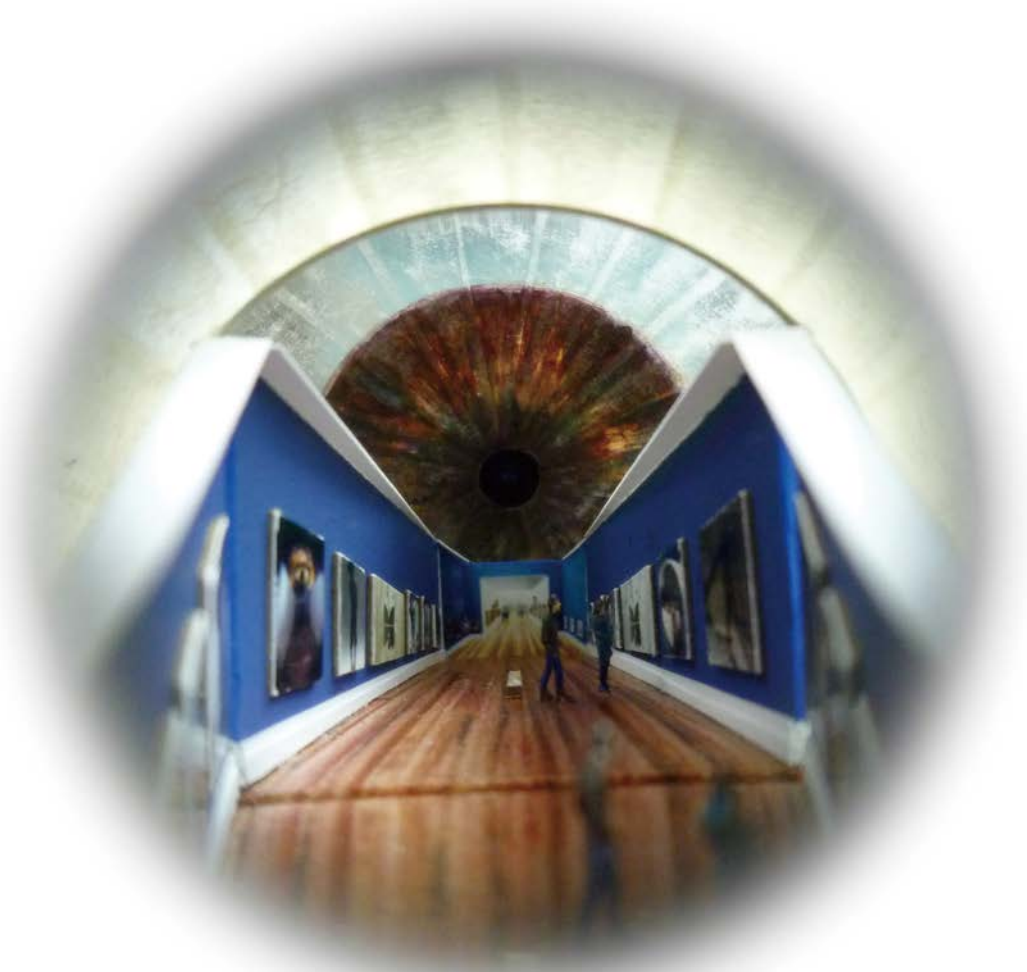


名古屋 文化情報

2014
11・12
November / December

No. 359
NAGOYA
Cultural
Information

随想／刈馬 カオス（劇作家・演出家・刈馬演劇設計社 代表） 視点／芸に生きる名古屋芸妓の心意気
この人と／天野 武子（チェロ奏者・愛知県立芸術大学名誉教授） いとしのサブカル／鈴木 創（シマウマ書房店主）





Contents

名古屋市民文芸祭 受賞作品…………… 2

随想 私が審査員をする理由…
刈馬 カオス(劇作家・演出家・刈馬演劇設計社 代表) …… 3

視点 芸に生きる名古屋芸妓の心意気 …… 4

この人と…
天野 武子(チェロ奏者・愛知県立芸術大学名誉教授)…………… 6

ピックアップ 応援してます!ボーイズダンサー達 …… 10

いとしのサブカル 鈴木 創(シマウマ書房 店主)…………… 11

おしらせ…………… 12

「なごや文化情報」編集委員

- 倉知外子 (オクダ モダン ダンスクラスター副代表)
- 酒井晶代 (愛知淑徳大学メディアプロデュース学部教授)
- 田中由紀子 (美術批評/ライター)
- はせひろいち (劇作家・演出家)
- 米田真理 (朝日大学経営学部准教授)
- 渡邊 康 (椋山女学園大学教育学部准教授)



表紙

作品
「Institute of Intimate Museums 眼球」
(2012年/鏡、プラスチック球、和紙、マット紙/直径7.5cmの球体)

眼球の形をしたこの作品は、手のひらに乗るほどの大きさですが、覗き込むと、中には広々とした空間が続いています。「見る」という行為を改めて興味を持って意識してほしい。そんな思いで制作しました。

杉山 健司 (すぎやま けんじ)

- 1962年 名古屋市生まれ
- 1989年 愛知県立芸術大学大学院 修了
- 1999年 First Steps Grey Art Gallery NY大学/アメリカ
- 2000年 The Pollock-Krasner Foundation, Inc.
- 2003年 ポジション 名古屋市美術館
JAPAN RISING Palm Beach 現代美術館/アメリカ
- 2007年 City net Asia ソウル市美術館/韓国
- 2014年12月 個展予定 Prima Noctis Art Gallery / スイス

「2013年 名古屋市民文芸祭」
（第六回名古屋短詩型文学祭）小・中学生の部
詩の部 受賞作品より ※受賞時の学校・学年で掲載しています。

◆市長賞◆

ダンゴムシ

椋山女学園大学附属小学校3年
安藤 彩夏

ぼくはくるっと まるまるよ
「コロコロコロ」と
楽しいね

ぼくの食べ物 落葉だよ
「ムシヤムシヤムシヤ」と
おいしいな

ぼくの父さん 母さん大きいぞ
「ドスンドスン」と
おすもうさん

ぼくのすきな の 自ぜんだよ
「ヒューカサカサ」と
風の音

ぼくのおうちは 岩の下
「しけしけしけ」と
つめたいね

ぼくの妹・弟は
「チビチビチビ」と
小さいね

ぼくはすきないろいろなあるが
一ばん家族がだいすき

随想

私が審査員をする理由



刈馬 カオス(劇作家・演出家・刈馬演劇設計社 代表)

『クラッシュ・ワルツ』で第19回劇作家協会新人戯曲賞。『モンスターとしての私』で第18回テアトロ新人戯曲賞佳作。作品の外部提供や、ワークショップ講師、大道芸人ショーの演出など多数。愛知淑徳大学非常勤講師。

やたらと審査員を任されるようになった。

ミノカモ学生演劇祭に始まり、G/pitチャレンジフェスティバル、高校演劇の岐阜地区大会・愛知県大会、名古屋演劇杯、劇作家協会新人戯曲賞1次審査と、今年は6つもやっている。1日で終わるものもあれば、5日間で25本もの作品を観るものもあり、1ヶ月で34本もの戯曲を読んだり、3ヶ月に渡り毎週劇場に足を運ぶものもある。それは全て、誰かが苦心して創りあげた作品を評価するという点で変わらない。生半可な気持ちでは失礼にあたる。脳みそフル回転で必死に見る。時には、恨みを買うこともあるだろう。私自身、審査される側になってボロクソに言われると「アイツはなんにもわかつちやいない」と罵倒する。心の中で。また、審査員の作品がつまらなかった日にゃ「もっとマシな芝居つくってから言え、バーカバーカ」と罵倒する。心の中で。そんなリスクを考えると、決して割りの良い仕事とは言えないが、積極的に引き受けるようにしている。なぜなら、審査されたことで今の私

があるからだ。

20歳のとき、初めての台本を書いた。母校の演劇部によって上演され、高校演劇愛知県大会に出場した。その時の審査員は、佃典彦さん(劇団B級遊撃隊)で、直接講評をいただけることになった。控室で待っていると、アロハシャツ姿の佃さんが登場。席につくなり、言った。

「ダンチだよ」

3秒ほどの沈黙のあと、「は?」と聞き返した。彼はかまわず続ける。「脚本書いたの誰?君?ダンチだよ」段違い、という言葉がこのように略す人に初めて会った。しかし、その言葉は魔法のように私を浮かせ、心に熱いものがめぐるのを感じた。それから17年、書き続けている。そして、佃さんがしていた高校演劇愛知県大会の審査員を、今は私がやっている。あの日の私のように、私の言葉で、人生が変わる人もいるかもしれない。その責任の重大さと喜びを感じながら、私は今日も審査員をしている。

芸に生きる名古屋芸妓の心意気

名古屋では、かつて遊興の店が軒を連ね、そこで日本舞踊や音曲を披露する芸妓(げいこ)が多数活躍していた。ところが時代を経るにしたがい、飲食代を上回りかねない“お座敷”代にお金を使うことは、少なくなっていく。

だが、ここ名古屋のお座敷芸がすっかり失われてしまうとすればそれは大きな損失である。「芸妓さんの芸は、受け継がれるのだろうか?」。その疑問を抱えながら、名古屋の芸妓さんの本拠である名妓連組合(名古屋伝統芸能振興会)を訪ねてみた。(まとめ: 米田真理)

名妓連のおけいこ風景

名妓連の本部はテレビ塔のごく近く、地下鉄「久屋大通」駅前のビルの5階、まさに都会のど真ん中にある。入り口の扉を開けていただいた瞬間、目の前に外とは別天地の“和”の空間が広がった。

5階全部を占める広いスペース全体が畳敷きになっており、板張りのけいこ舞台が設けられている。新しい畳の香りにつつまれ、自然に背筋が伸びるような、ほどよい緊張感が漂う。

折しも、9月初旬の「第67回 名古屋をどり」に向け、おけいこチケット発送の準備で大忙しの様子だった。名妓連は9月7日の特別番組として「名古屋甚句」の踊りを披露されるのだ。

芸妓さん一同、爽やかな夏の着物や浴衣姿で勢揃い。艶やかに響く三味線の音色に、弾むような唄の声。名古屋の町名や金鯱の物語を盛り込んだ歌詞に合わせ、身振り手振りを織り交せて楽しげな踊りが繰り広げられる。



「名古屋甚句」のおけいこ

一通り踊り終わると、額の汗をぬぐい水分の補給。少し息が弾んでいる。軽やかな動きに見えていたが、かなりの体力を使うのだ。

そして、後輩への指導の言葉が飛び交う。踊りのあいたの賑々しさから一転し、ぴんと張り詰めた空気だ。名古屋の芸妓さん方の、芸に向かう姿勢の厳しさが窺われる。

そこで、最初の疑問が再び頭の中をめぐってくる。「芸妓さんの芸は、受け継がれるのだろうか…?」



唄・三味線のみなさん

現代っ子の芸妓修行

そうしたお忙しい中、中心的な存在である金丸(きんまる)姐さんにお話を伺うことができた。

まずは率直な質問から投げかけてみる。「新人の方は、この世界に慣れるまでが大変なのでは?」。

もちろん大変だけれども、それはこの世界が特別だからというよりは、世の中のほうが変わってしまったからだ、と金丸さんは説明してくださった。

第一、現代では和室での立居振舞じたいが日常的ではない。ふすまの開閉をはじめ、座ってのお辞儀や移動のしかたなど、一から覚えなければならない。他にも、着物の着かたや畳みかた、お酌のしかたなど、入門してから習い覚えることは山ほどあるのだ。



クライマックスのにぎやかな場面

振舞だけでなく、言葉遣いが粗暴にならぬよう、また、身なりに清潔感が保てるよう、すべてに気を抜くことはできない。確かに、現代っ子には厳しい面が多いだろう。

だが、唄や三味線、鳴り物など音楽の関係は、現代の若者のほうが音感がいいからか、飲み込みが早いようだ。どの方面からにせよ、芸を好きになってしまえば、多少のことは我慢できるはずだ、と金丸さんは言う。

芸妓であり続ける覚悟

金丸さんは、踊りが好きでこの世界に入った。子ども時代を温泉街で過ごしたため、生活のすぐそばに、踊りの環境があった。やがて、きれいな芸妓さんの踊りを目にするうちにどんどん好きになっていき、自分も踊りを仕事にしたいと思ったそうだ。

そのような、身近に芸事がある環境も現代では失われてしまった。芸妓を志す人の多くにとって、踊りは師匠の手ほどきのもと、一から習うものになった。

ただ、日本舞踊に限らず芸事をきちんと習い覚えるには、お金がうんとかかる。そのお金が個人の負担にならぬよう、公的な助成なども受け、連盟全体で新人の芸妓を育てていくのだ。

その際、どうしても芸事を好きになれない場合も困るが、何より、ある程度きちんと育った後で、仕事が続かず辞めてしまうのが本当に残念なのだ、と金丸さんは嘆く。女性がどのように働き続けるかという問題は社会全体のものだが、芸妓の世界は特に、なかなか子どもを抱えて……というわけにはいかないようだ。芸妓を女一生の仕事とするには、大きな覚悟が必要なのである。



名妓連自慢の伝統芸「金の鯨」

芸妓は芸あってこそ

それでも芸妓であり続けようとする情熱の源は、人前で演じる楽しさにある。

「金丸さんにとって、理想的な踊りの場はどんなところですか?」と尋ねてみたところ、意外な答えが返ってきた。「場所は選ばず、2畳程のスペースがあればどこでもお受けしたい」。

筆者は、お座敷の閉じた空間で、目の肥えたお客様だけに見ていただくのが理想なのは、と予想していた。だが、実際は逆で、わかる人だけに見てもらっては芸が上達しない。特に

「名古屋をどり」をはじめ、たくさんの人の前で発表できる機会がないと、新しい芸を覚えようという気にならないし、けいこに身が入らない。

踊りが大好きな金丸さんだが、現在は地方(じかた)つまり三味線の演者をつとめている。ある時期、人手不足によりテープの録音に合わせて踊るようになったのだが、それがあまりにも嫌だったため、自分が地方に回ることにしたのだ。立方(たちかた)を退いたのは不本意だったけれども、本来の芸の形が守られることを良しとしての決断だった。それだけ、芸を愛する心が強いのだ。

そこで、金丸さんが語調を強くしておっしゃったのが、「芸妓は芸あってこそ」という言葉である。「よその土地へ行ったとき、お酌だけして芸妓や芸者を名乗っている人を見ると、『なにやってんの』という気持ちになる」。

その言葉に、金丸さんが三味線を弾くときの美しい横顔と、ぴんと伸ばした背筋が重なり、いちだんと輝かしく感じられた。この気迫は、現在活躍されている若手の芸妓さんにも受け継がれているだろう。ならば、芸妓さんの芸も大丈夫なのではないか……と、最初の疑問が解けた気がした。



美しい出立の芸妓さん勢揃い

芸妓さんの芸を気軽に楽しめる機会が、この秋、名古屋市街に設けられる。二回目を迎える「やっとかめ文化祭」の企画のうち、「芸どころ名古屋舞台 名古屋に息づく大衆芸能の世界」、「芸どころまちなか披露」、「まちなか寺子屋 老舗料亭でお座敷遊び体験」、そして「名古屋ほろ酔いバスツアー」である。

名古屋市文化振興事業団発行のパンフレットやホームページをご参考に、ぜひ、名古屋の伝統芸を体感していただきたい。



まちなかでの踊りの披露

この人と...



チェロ奏者・愛知県立芸術大学名誉教授

あまのたけこ 天野 武子さん

チェロと共に生きて

天野さんのお話を伺っていて、ふと「人生には何ひとつ無駄なものはない」という言葉を思った。

愛知県立芸術大学の創立初期から大学の礎を築く仕事に携り、42年の長きに渡り奉職し、退任後も演奏者として教育者として今なお元気に進化し続けている天野さん。「チェロと共に生きて」その人生を豊かにした音楽との関わりを伺ってみようと思う。(聞き手:渡邊 康)

邦楽に親しんだ子ども時代

天野さんは終戦の2ヶ月前、大曽根からの疎開先である多治見で誕生した。音楽を初めたきっかけを伺うと、「最初はお三味線を習いました。両親とも邦楽が趣味で、特に父は長唄を歌ったり、尺八を吹いたり。たまたま家の裏に三味線のお師匠さんが住んでいらっやったので、6歳の6月から毎日お稽古に通ったんです。」とのこと。



小学生の頃 多治見の自宅にて

また、幼い時から大曽根から運んできた、爆弾の痕があるオルガンを好きで弾いていたそうである。7歳から姉の友達のお母様にピアノを習い始めた。「生意気にも、ちょっと西洋音楽の方が良いなと思うようになりました。なぜかピアノの方がおもしろい。」それで、三味線は4年生ぐらいでやめてしまい、ピアノを習い続けた。

小学校・中学校での合奏体験

通っていた多治見の養正小学校は器楽クラブの活動が

盛んであった。退任していたが、校条武雄先生の熱心なご指導で、合奏コンクール日本一にもなったことで注目されていた。天野さんはそのクラブでピアノを担当していた。「その時点で合奏がすごく好きで、人と合わせるのが大好きだったんです。」小学校時代からアンサンブルへの興味がはっきりしていたのである。

その後、金城学院中学校に進み、オーケストラのメンバーになろうと、ピアノ以外でこの年齢から始められる楽器を考えた。「管楽器という感じでもないし、チェロかなと思っていたら、ちょうど兄が趣味でチェロをかじっていて、ちょっと楽器を持ってきてくれたりしたことが決め手でチェロを選び、オーケストラに入部しました。」

天野さんとチェロとの出会いである。

金城学院のオーケストラの先生で指揮者は、なんと養正小学校を退任された校条武雄先生だった。さらに宣教師で、



小学校 器楽クラブ

ホルン奏者でもあったケリー先生が加わって、毎年の「メサイヤ」公演の礎を築く等、盛んにオーケストラや音楽教育の活動を展開していた。天野さんが進む道にはやはり音楽への運命的な出会いがあったのである。さらに名古屋放送児童管弦楽団（現在のNHK名古屋青少年交響楽団）へも金城オーケストラのチェロメンバーとして参加し、色々な先生との出会いや、演奏旅行などもあった。

車中が勉強する場所だった中高生時代

そこでさらに本格的にチェロを勉強すべく、東京の小沢弘先生のもとにレッスンに通うことになる。金城学院中学校・高等学校は、当時珍しく土日が休みだったので、東京に通うことも可能だった。「土曜日一日かけてレッスンに行くことができました。新幹線がまだ無かったですから、準急の東海3号に朝早く乗って東京に昼ごろに着き、レッスンを終えて夕方。今度は特急に乗って帰って…それでも4時間かかりましたね。」と当時を振り返られる。

毎日の通学は汽車である。「『汽車通』という言葉は今では死語になっていますが、金城に通うのは蒸気機関車だったんですよ。今は35分位で多治見に行けるのに、その頃、中央線は単線だったし、片道一時間以上かかりましたよ。トンネルも多かったし、白い制服がススでよかったですね。」

愛知県立芸術大学に就職しても東京への往復が多く、「私の人生は乗り物人生だったのですね。」と言う。「いつも乗り物の中で勉強していた。勉強する場所は乗り物の中と決めていたかもしれません。」音楽プレーヤーも携帯電話も無い時代で、自分が演奏している曲、弾きたい曲に想いを馳せ、心の中で音楽を聴いたり、車窓から眺める季節の移り変わり、自然の素晴らしさと向き合う経験は貴重であったと言う。「そういうものがどこか私の中に残っていると思います。今より時間がかかったり、不便だったりしましたが、逆に良い時代だったと思います。」



高校生の頃 ピアノ 田隅靖子先生と

東京藝術大学に入学 室内楽に没頭

東京藝術大学に合格して、学部での寮生活、大学院での下宿生活が始まる。周りの優秀な仲間たちに刺激されて大いにがんばらねばならなかった時代だったと言う。

「私ね、大学時代は室内楽にはまっていた。同学年

のチェロ専攻学生は2人だけだったんです。他の学年には4~6人いたのに。ヴァイオリン専攻生は23、4名でした。それで頼まれてクアルテットを何組もやっていました。」寮は学内にあり、通学時間も無く、求められるまま弦楽四重奏にのめり込み、クアルテットの面白さ、素晴らしさに開眼することができた。オーディションによって選ばれた年に2回の奏楽堂での室内楽演奏会や、大学の芸術祭での自主的な様々な組み合わせの発表活動によって、多彩な室内楽経験を積み、大学院までの6年間でたくさんのレパートリーを得ることができたそう。「それと、室内楽だといろいろな先生にみてもらえるんです。フルートの吉田雅夫先生、ピアノの田村宏先生、伊達純先生、ヴィオラの浅妻文樹先生等にも。また選抜して頂き、ジュリアード・クアルテットの講習会等にも参加した。」室内楽を通して幅広く音楽を深めることができて、ありがたかったそう。

さらに大学院の1年生から浅妻文樹先生が主宰する、東京アカデミカー・アンサンブルに参加した。



藝大生の頃 自宅にて

東京アカデミカー・アンサンブル

東京アカデミカー・アンサンブルはヴァイオリン7、ヴィオラ3、チェロ2、コントラバス1の小編成アンサンブルで、年に2回上野の東京文化会館小ホールで定期演奏会を開き、音楽祭に参加する等海外公演も多数行い、その他のコンサート、放送、録音等、中身の濃い活動を展開していた。フルートのジェームス・ゴールドウエイ、オーボエのロータ・コッホやチェンバリストのジョージ・マルコム、バロックチェロのアンナー・ヴィルスマなど海外の有名ソリストとの共演を常時行う演奏団体で「彼等の素晴らしい演奏と、小さな編成で、間近にすごいソリストと息を合わせて音楽づくりができたことは、私の貴重な栄養となりました。」



東京アカデミカー・アンサンブル(浅妻文樹氏 指揮)

愛知県立芸術大学に奉職

昭和45年愛知県立芸術大学(以下、愛知芸大)に赴任し、42年の長きに渡り奉職することとなった。「赴任当時、大学に行くのに地下鉄は星ヶ丘まで、その先はガタガタ道をバスで。それから30年ちょっと、愛知万博で高速道路が近くまででき、リニモで通学するようになったことは、周りに何も無く、丘の上に校舎だけがぼつんと建っていた創立時を知っている卒業生たちにとって驚きでしょう。」



レーヌ・フラッシュ先生と家族と共に

中村桃子先生

「愛知芸大創立からのヴァイオリンの教授、中村桃子先生に色々な意味で育てられ、助けて頂きました。岡山芳子先生からも多くを学ばせて頂きましたが、岡山先生と2人でいつも、『桃子先生から教育者としての姿勢、熱心さを教えられましたね。』と懐かしく語り合います。」「日本の西洋音楽の黎明期から音楽を学ばれ、太平洋戦争の戦渦の中をくぐり抜け、音楽への愛を貫かれた先生の情熱を思い、先見の明と細やかな洞察力を持ちつつ、いつも明るくフランクに接して下さったことに、深く感謝をしております。読書家で広範囲な文化的造詣が深く、尊敬できる方でした。」「中村桃子賞並びに頂いた基金でどれほど大学が助けられていることでしょう」と、心より尊敬している中村桃子先生への思いを語られた。

教育者として

大学の室内楽の授業はまず一年間通して一曲丁寧に勉強し、最後にオーディションを兼ねた試験で合格し、選ばれたグループが演奏会に出演する。「そこで学生たちの本心に素晴らしい演奏を聴くと、他では味わえない喜び、嬉



愛知芸大チェロアンサンブル「セリバルタ」第1回公演

しさがこみ上げます。苦労し、試行錯誤し、最終的に良い演奏になると。でもそれは稀少で、貴重なことですけどね。」と言う。

弦楽四重奏は4人でひとつの作品を再創造する。奥深い内容まで追求し、精一杯の想いを4人で表現できた充実感は格別だ。天野さんは、「そんな醍醐味を味わうと、卒業後も室内楽に情熱を持ち、こだわり続けてくれるのだと思います。」「室内楽の世界は独奏、オーケストラ、オペラなどの分野に比べると、やっぱり地味で分かり難いと思われています。弦楽四重奏は特にそうです。これは音楽の真髄で、最高に内面的で精神的に充実感溢れる分野であると、私が学生時代に感じ入ったことが、学生たちに伝えられたら、と願っていますが…。」と室内楽への情熱を込めて語る。

「もう一つ、弦楽四重奏のチェロのパートは低音部で、上三人のパートを支える役割を持っています。下支えですね。」音楽と天野さんの生き方が連動していたのだと感じた。

アーティスト・イン・レジデンス

2007年から2011年3月まで愛知芸大の芸術創造センター長としての在任中、アーティスト・イン・レジデンスを行った。本来は、芸術家や研究者をある地域や大学や研究機関に招き、半年とか一年間滞在して芸術活動や共同研究をしてもらうものである。大学では、主にヨーロッパの大きな実績をもった演奏家・教育者を招いて、2週間ほど大学内に滞在して、演奏会や学生たちの公開レッスン、アーティスト・トークをしてもらい、地域の皆様にも聴いていただく形とした。

学生も教員も、素晴らしい演奏家と一緒に演奏できることは、学生たちの良い刺激にもなるし、教員にとっては教育のための良い指針になる。このアーティスト・イン・レジデンスはアカデミカー・アンサンブルでの活動にその発想の原点があったのである。弦楽器ではボッセ先生、カンギーサー先生、ヤーン先生など、大変実り豊かな数々の演奏会やレッスン等が親しみ深い思い出となっているようだ。



愛知芸大弦楽アンサンブル
(ボッセ先生とメンデルスゾーンスペシャル公演練習風景)

チェロと共に生きて

還暦の頃から自分の演奏会に「チェロと共に生きて」とタイトルを付けるようになった。大学や演奏会等で活動し、家族、友人、お世話になった方々との関わりの中、色々なことがあって…チェロとの付き合いは57年になると言う。やはり共に生きてきたのだ。愛知芸大を退職してからは、ソリストとしての活動が中心となっている。大学に勤めている間は、教育と演奏と管理職の仕事で、自覚はしていなかったけれど、なかなか落ち着いて集中し独奏に向き合うことが難しかったのだ。今はチェロ、音楽に助けられている自分を、家族をはじめ支えてくださっている方々への感謝の気持ちと共に深く感じていると語る。そんな中で、日本の作曲家の作品に目を向けるようになった。「今まで、ずーとヨーロッパで生まれた音楽を、こうじゃないか、ああ在る



「チェロと共に生きて」 リサイタル2012年

べきじゃないかと推測したり本を読んだり勉強して、どれが本当にいい演奏なのかを模索してきた。」「でも平野一郎さんという、地方の子守唄や日本古来の文化・音楽に根ざした作品を創られる作曲家を知って、彼の丹後地方の子守唄を題材にした『たらちねのうた』や、細川ガラシャの運命を綴った『伽羅奢』を初演して、自分のやりたいことがみえてきました。」これからは日本人の作品、特に自然に共感し、根源的なものとして表現できる作品を積極的に演奏しようと考えているようだ。

カザルスと「鳥の歌」

「それからパブロ・カザルスの存在が私にとってはとても大きなものです。」と語る。残念ながら直接師事することはできなかったが、録音と彼について書かれた著作、彼自身の名言を通して、チェロを学び始めた頃からその凄さに敬服していた。そして1971年10月24日の国連本部での平和を願うスピーチと「鳥の歌」の演奏を衛星中継で聴いたのが、天野さんの音楽に対する姿勢と思いを変える決定

的な出来事となった。「チェロと共に生きる」ということのがかなり大きな原点となっている。

「あの時の演奏とスピーチがあまりにもすごくて、『鳥の歌』に込められている思いを自分のものとして表現できるようになるまで、この曲を弾いてはいけない、と深い感動と共に、『鳥の歌』の演奏を封印しました。その後、バルセロナ・オリンピックの閉会式で『鳥の歌』がまずチェロで弾かれ、次に子供たちと女性コーラスが歌ったのを聴いた時、ふーっと、私が弾いても良いかしらと思えるようになりました。」カザルスの生家のある、バルセロナから電車で行けるヴェンドレルや、地中海に近く今は博物館になっているサンサルバドル等を訪れ、彼が



カザルスの銅像と共に

を見つけ出したバッハの無伴奏チェロ組曲の楽譜を見たり、「鳥の歌」の部屋ではカザルスの演奏が流れていて、スペイン内戦が映写されている部屋で演奏に合わせて女性がロズさんで歌っているのを聴いて、クリスマス・キャロルとしてのカタロニア民謡「鳥の歌」を素直に感じたそうである。

カザルスが愛するカタロニアの人々が戦争で苦しみ、彼等を勇気づけ支援しようとして演奏した「鳥の歌」。民族の歴史を深い背景にもつこの曲を、演奏会の最後に、もう100回以上いろいろな想いで弾いているという。

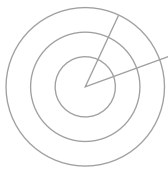
今後の活動

来る11月26日には ライプツヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団の首席チェロ奏者でゲヴァントハウス弦楽四重奏団のチェロ奏者でもあるユルンヤーコブ・ティム氏と花崎薫氏との「3人のチェリスト」一深く、温かく、円熟のチェロ・トリオのコンサートが予定されている。

音楽の真髄を追求し続けている演奏家達の心の響き合いは、3台の名器の響き合いを増幅して、聴衆皆様の心を震わせることだろう。

天野さんの「チェロと共に生きて」の活動と精神はこれからも続いていく。そういった熱い情熱を強く感じたインタビューだった。

ピックアップ



応援してます! ボーイズダンサー達

今年の2月、スイスのローザンヌ国際バレエコンクールで高校生の二山治雄さんが優勝したことは記憶に新しい。過去には熊川哲也さんが同賞を受賞し、現在は男性ダンサーのスターとなって日本バレエ界に君臨している。もちろん、女性ダンサーも数多く国際コンクールなどにて活躍している。その様な状況の中、地元のバレエ界の若手男性ダンサーが大勢になり、その活動情報が多く入る昨今である。

筆者が舞踊団員として活動を始めた頃は男性ダンサーは希少だった。来年は戦後70年の節目の年となり、筆者もほぼその時代の人生を生きているが、現在はバレエ、モダンダンス、ジャズダンス、ヒップホップ、ストリートダンスなど多種多様な舞踊が往来する。かつては、舞踊は女性の世界であるかの様な風潮があり、小中学校の先生達ですら理解がなかったが、今は中学校の必須科目となった。

その様な風潮のなかで、約30年以上前に演劇から舞踊へと転じて現在、バレエ界にてダンサーで指導者として活躍をされている大寺資二氏、高宮直秀氏に集うボーイズクラスの未来の若手男性ダンサーについてインタビューをした。

両氏は、ほぼ同時期に各々の劇団に在籍している頃



大寺資二 バレエアカデミー 作品「KIZUNA」(和光写真)



バレエ・ダンススタジオ・ユニコーン

に出会ったバレエの先生の勧めでバレエを始めたが、今の子ども達は小学生からバレエに憧れて入団している。かつては0~数人であった地元の各バレエ団に現在は多数在籍し、名古屋近郊には年齢問わず推定100人以上のボーイズダンサー達がいると聞く。2人の指導者は「男子は男性の指導による方がよいと考えられるのが、直々に入団したり、各バレエ団から派遣されてくる」とのこと。指導については「男性と女性の異なることを意識して男性の持つエネルギーと存在感をひきだすことを軸としているが、将来、このボーイズ達が夢を叶えられる環境になっていることを願う」と語られた。

去る7月に大寺資二バレエアカデミー第1回発表会が開催され、ボーイズのみ13人による「KIZUNA」という大寺氏によるオリジナル作品を観た。若いながらも、一途さとパワーを感じる事ができた。高宮氏は所属等の垣根を越え集まる男性ダンサー10人以上の作品を発表している。大阪でも20歳~40歳台の男性ダンサーのみによるスポンサー付きの公演があり、定着した活動をしていると聞く。両氏ともに垣根をこえて絆を太くし地元のバレエ界、舞踊界の発展に寄与してほしいと期待し、ボーイズ達が夢を叶えて安心して活躍できる社会をと願う。(K)

いとしの サブカル

移りゆく街と向き合う

シマウマ書房 店主

鈴木 創 (すずき はじめ)

1973年東京都生まれ。2006年に名古屋市千種区の本山駅近くに古書店シマウマ書房を開業。著書に『なごや古本屋案内』（風媒社）。名古屋における本のイベント「ブックマークナゴヤ」実行委員。

古本の仕事をしていると、毎日さまざまな本が手元にまわってくる。たとえば『名古屋青春街図』（1980年／新生出版編・発行）の前書きのページを開くと、この本が当時の名古屋におけるマイナーなモノや人に目を向けたガイドブックであるという説明とともに、次のような言葉が記されている。

「でも、本当はマイナーであり続けることは、ものすごい覚悟と気力と創造力が必要で、そして何より独創的なことなのです。薄っぺらで頭でっかちなメジャーなものより、多くの秀れた部分があり、その必然性があることを僕は知っています……」

このように言い切るだけの確信や情熱を、おそらく現在の「僕ら」は持ち合わせていない。それだけに、今の時代にサブカルチャーを語るのは意外に難しいことなのかもしれない。同書の後半の、70年代を振り返る記事では、若者文化、サブカルチャーを支えてきたものとしてローカルなミニコミの存在が挙げられている。名古屋で最初のミニコミとされる「フィーリング」を筆頭に、「どみに」「白い週刊誌」「ナゴヤジャーナル」「プレイガイドジャーナル」など。各誌の視点によって言及される街の

トピックはさまざまであり、その多様性こそが街の活気でもあったのだろう。

もう一冊、『デートアラカルト名古屋版』（1985年／小笠寺弘尚ほか編・海越出版社）というガイドブックは、現在シマウマ書房のある本山周辺が「名古屋の原宿」と呼ばれたバブルの頃の街の姿を伝えている。

「前庭にプールがあり、気分はリゾート」なレストランや、流行の最先端のブティックが集まる街。そのほとんどが今では跡形もないのだから、当時の写真を見ていると、狐につままれたような気持ちになってくる。

弊店は開業して9年ほど。その間にも時代の変化はあり、土地持ちの経営者はともかく、高い家賃を払って街に店を構えることの意義が、最近とはくに薄らいでいる実感がある。同世代の店主のなかには街の店舗を切り上げて郊外や田舎に移り、あまりコストをかけずに自分たちが本来目指していた仕事のあり方に専念する、あるいはインターネットやイベントでの販売に力を入れるといった方向転換が増えている。

このまま街が空洞化しては、という思いから2年前に、覚王山・本山・東山公園をつなぐ「3Mt.MAP」というエリアマップを有志で発行した。商店街のような網羅的な観点ではなく、若い世代に向けて選んだ50店ほどの情報を盛り込み、併せて自転車の貸し出しも試みた。かなり好評だったが、わずか2年の間にも掲載の2割近い店が閉店や移転をしてしまったため、現在、改訂版の準備にとりかかっているところだ。

少し時間のあるときに、自分なりの地図を作ることをイメージしながら街をあらためて歩いてみると、思いのほか多くの発見がある。しばらく通っていない道を歩くだけでも自分の街が広がっていく。気軽にできることなので、ぜひ皆さんにもお勧めしたい。



古いガイドブックにはその時代の街の空気が詰まっている



やっとかめ文化祭

やっとかめ文化祭 ~芸どころ・旅どころ・なごや~

「やっとかめ文化祭」は名古屋の歴史・文化の自慢を一堂に集めた、文化の祭典。多彩な伝統芸能の公演、体験講座・ワークショップ、歴史まち歩きなど、まちを舞台に名古屋の魅力に出会う25日間です。

古典の日・邦楽名古屋舞台 ~邦楽散歩いまむかし~

- ◆日時：11月1日(土) 14:00、18:00
- ◆会場：名古屋市北文化小劇場
- ◆料金：各回一般3,000円 学生1,500円【全自由席】

能舞台に舞う ~今をときめく日本舞踊家の競演~

- ◆日時：11月3日(月・祝) 14:00
- ◆会場：名古屋能楽堂
- ◆料金：一般3,000円 学生1,500円【全自由席】

ろうそく能 能「国栖」・狂言「棒縛」

- ◆日時：11月8日(土) 14:00
- ◆会場：名古屋能楽堂
- ◆料金：指定席3,000円 自由席一般2,000円 学生1,500円

名古屋に息づく大衆芸能の世界

- ◆日時：11月9日(日) 14:00
- ◆会場：建中寺徳興殿
- ◆料金：一般2,500円 学生1,500円【全自由席】

Rokurobyoue版 O-KI-NA ~天下泰平・国土安穩の祈り~

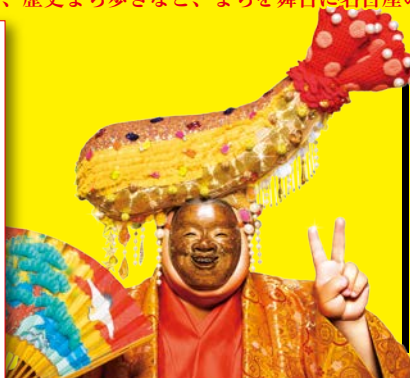
- ◆日時：11月14日(金) 18:30
- ◆会場：名古屋能楽堂
- ◆料金：指定席A 4,000円 自由席一般2,000円 指定席B 3,000円 自由席学生1,500円

いい夫婦の日特別公演 「幸せを運ぶ能・狂言」

- ◆日時：11月22日(土) 14:00
- ◆会場：名古屋能楽堂
- ◆料金：一般1,500円、中学生以下500円【全自由席】

劇座版 東海道中膝栗毛

- ◆日時：11月23日(日・祝) 11:00、15:00
- ◆会場：建中寺徳興殿
- ◆料金：各回一般2,500円 学生1,500円【全自由席】



日程：10月31日(金)~11月24日(月・休)
主催：やっとかめ文化祭実行委員会

<構成> 名古屋市(文化振興室、観光推進室、歴史まちづくり推進室)、公益財団法人名古屋市文化振興事業団、名古屋観光コンベンションビューロー、中日新聞社、名古屋観光ブランド協会

問い合わせ：名古屋市文化振興事業団チケットガイド
TEL052-249-9387
(平日9:00~17:00)

※事業の詳細は
<http://www.yattokame.jp>をご覧ください。

オープニング

- ◆日時：10月31日(金) 18:00 ◆会場：ミッドランドスクエアB1階アトリウムイベントスペース ◆料金：無料

芸どころまちなか披露

辻狂言、みちばた芝居「痛快!川上貞奴一座」、長唄、箏曲、お座敷芸など、名古屋の街の中で伝統文化に出会う各種ライブを開催。

- ◆期間：11月1日(土)~24日(月・休) ◆会場：大須商店街ふれあい広場 ほか 全14会場 ◆料金：一部有料

まちなか寺子屋

歴史的な建造物で、歴史や伝統文化を楽しく学ぶ講座・ワークショップなどを実施。〈全23種・24回〉

- ◆期間：11月1日(土)~24日(月・休) ◆会場：万松寺 ほか 全23会場 ◆料金：500円~6,000円

歴史まち歩き

名古屋の魅力を再発見する「まち歩き」を実施。〈全36コース・48回〉

- ◆期間：11月1日(土)~24日(月・休) ◆会場：市内各所 ◆定員：各回20名 ◆料金：500円

一味違う印刷をお探しのあなた!
箔印刷は押してましたが、今は

箔がっつくんです!!
(コールドフォイル印刷)

鬼頭印刷株式会社

Tel.052-681-1701 Fax.052-679-1171
data@kito-net.com www.kito-net.com
〒456-0073 名古屋市熱田区千代田町3-22

- コールドフォイル印刷
- フォログラム転写印刷
- UVオフセット印刷
- バリアブル(可変データ)印刷
- オフセット印刷
- Mac、Win、DTPデータ作成
- B倍プロッター出力

舞台映像専科

ステージの感動を格調高い映像で追求します。
ハイビジョンで撮影し
ブルーレイディスクでお渡しします。



ビデオソフトの企画制作

有限会社 エーワン・ビデオ・システム
TEL(052)896-2256 FAX(052)896-4100

「ナゴヤ劇場ジャーナル」ではサポート会員を募集しています。

ナゴヤ劇場ジャーナル

◎年間6,480円で毎月お手元にお届けいたします。
◎毎月24,000部発行 ※東海地方の演劇・バレエ・音楽公演、各所顧客DM、他に配布

MP MANAGEMENT PRO 株式会社マネージメント・プロ

〒464-0850 愛知県名古屋市千種区今池1-14-11 CASA LUZ302
TEL (052) 735-3151 FAX (052) 735-3152 E-mail: mpoffice@pa2.so-net.ne.jp

業務内容

- ①舞台の企画・制作マネージメント
- ②イベントの企画制作
- ③芸術団体のコンサルティング
- ④舞台・イベントの運営

We make you move

舞台音響/映像設備 機器販売・設計・施工・保守・特注品製作

株式会社エーアンドブイ

〒464-0846 愛知県名古屋市千種区城木町二丁目98
TEL 052-761-5400 FAX 052-761-0909